

## 多文化主義国家のアポリア

Timothy B. Powell, *Ruthless Democracy: A Multicultural Interpretation of the American Renaissance*

星野 勝利

1785年10月、アメリカ合衆国軍の連隊長 Colonel Benjamin Logan とインディアンの Shawnee 族の酋長 Moluntha が、双方の境界線上で対峙する。Moluntha は、インディアンの土地所有権を認めた Miami Treaty を片手に持ち、もう一方の手には、歓迎と友好の意を示す星条旗をたなびかせて、連隊長の前に進み出る。これを迎える Colonel Logan は、軍律により、友好的な対応を求められていた。ところが、交渉の席に座った Moluntha の背後から、部下の一人がひそかに忍び寄り、Moluntha の頭に斧を撃ち下ろしてしまう。

アメリカ合衆国は、建国以来、さまざまな矛盾を抱え込む。植民地時代以来引き継がれてきた矛盾といってもよい。“All men are created equal” という、民主主義国家としての大前提もこの例外ではない。理屈としてこれを理解することと、心理としてこれを受け入れることは、必ずしも同じことではない。この矛盾は合衆国アメリカの国家的病理と規定してもよい。Moluntha の殺害もこの典型である。軍律や条約という厳しい枠の世界を乗り越えて、独特の病理が兵士のところを支配する。結果として、悲劇の数がまたひとつ増えていく。アメリカに内在する歴史的ディレンマである。

本書はこのディレンマを分析の対象とする。分析対象となるのは19世紀中葉のアメリカ文学である。この時期の分析としては F.O. Matthiessen の *American Renaissance* (1941) が知られる。Matthiessen は文学史の中に新しい準拠枠を提示した。Whittier、Holmes、Longfellow、Lowell という従来の権威に替えて、Emerson、Whitman、Hawthorne、Thoreau、Melville という新しいカノンを提示した。このカノンは、その後長いこと、文学研究の土台となる。ただし近年では、この堅固な土台も、必ずしも盤石なものではない。

Sacvan Bercovitch は *American Jeremiad* (1978) の中で、これらの作家と植民地時代のレトリックとの関係を詳細に分析して見せた。Jane Tompkins は *Sensational Designs* (1985) の中で、このカノンに、新たに Harriet Beecher Stowe や Susan Warner など、センチメンタル・ノベルを産出した白人女性作家を加えてみせた。一方、David S. Reynolds は *Beneath the American Renaissance*

(1989)の中で、メルヴィルやホイットマンの作品が、一般に知られていない当時の無名の書物にいかにか負うものであるかを跡づけてみせた。また Donald Pease は、Matthiessen 的カノンをアンチテーゼとして、たとえば *Cultures of United States Imperialism* (1993)の中で、階級、人種、性といった視点から、もう一つの文学観を提示してみせた。

著者もまた新しいカノンの提示を意識する。著者が準拠するのは、多文化主義 (multiculturalism) の概念である。ただしこの多文化主義は、著者によると、従来の liberal pluralism とはたもとを分かちものである。すなわち、人種的違いを認めつつもアメリカ人としてのアイデンティティの存在を前提とする穏健な pluralism ではない。むしろ、この存在に懐疑の視線を向け、対立をいとわずに、失われた声、歴史の中の声、社会の中の現実の声に、率直に耳を傾けるものである。アジア系、アフリカ系、ラテン系、インディアン系という、白人以外の多様な声の存在に耳を傾け、その文化を、それぞれアメリカ文化の一つとして位置づけ、その上で、国家アメリカのアイデンティティを考えようとするものである。著者によるとこれは、*Mapping Multiculturalism* (1996) の Wahneema Lubiano や、*A Different Mirror* (1993) の Donald Takaki の視点を受け継ぐものである。視点的には、radical multiculturalism あるいは historical multiculturalism と呼ぶべきものである。

このような視点から、著者は6人の作家を選択する。 *The House of the Seven Gables* (1851) の Hawthorne、*The Life and Adventures of Joaquin Murieta, the Celebrated California Bandit* (1854) の John Ridge、*Walden* (1854) の Thoreau、*Uncle Tom's Cabin* (1852) の Stowe 夫人、*Clotel, or, The President's Daughter* (1853) の William Brown、そして *Moby-Dick* (1851) の Melville である。

選択には著者の戦略がある。Matthiessen との対立軸をあえて鮮明に示すというものである。Hawthorne、Thoreau、Melville という馴染みの作家のほか、Ridge、Stowe、Brown の三者が含まれているのは、このことを示唆する。内容もこれを証明する。Hawthorne、Thoreau、Melville の章で論じられるのは、それぞれ、白人の土地所有意識の問題と土着のインディアンとの問題、黒人やインディアンやアイリッシュに対するソーローも含めたプロテスタント系白人の排除意識の問題、多民族・多文化の乗組員を乗せた捕鯨船と白い鯨の闘い、すなわち前者の敗北と白の勝利の問題、などである。Matthiessen の分析は、単一文化主義 (monoculturalism) の分析でもあった。白人の作品の芸術性、ことばや文体、形式や思想の分析である。これに較べると、本書の視線は、たしかに radical であり、

かつ historical である。

Ridge、Stowe、Brown の分析になると、これが更に鮮明になる。これらの章で論じられるのは、移住を余儀なくされたチェロキー・インディアンの「涙の道」(Trail of Tears) の歴史や、土地を奪われた土着のメキシコ系アメリカ人の怒りの問題、あるいは、*Uncle Tom's Cabin* の末尾で、生き残った黒人奴隷がアフリカの自由の国リベリアへ向かうことの問題、そして *Clotel* が提示するアメリカ的ディアスポラの問題、すなわち逃亡奴隷法下の逃亡奴隷の問題などである。いずれも、いかにも radical であり、かつ historical である。

もう一つ大きな特徴が本書にはある。Historical Interlude として、章ごとに、19 世紀中葉の歴史的事実が挿入されていることである。挿入される 6 つの事実は、それぞれ、(1)インディアンの存在で州の統治が乱れていることを当時の陸軍大臣に訴えたジョージア州知事の 1824 年の手紙、(2)ゴールドラッシュ真っ只中の 1849 年に行われたカリフォルニア州法制定会議の参政権をめぐる議論、(3)1844 年にフィラデルフィアで起きたカトリック (アイリッシュ) に対するプロテスタントの暴動、(4)1848 年 1 月のリベリア共和国建国と黒人初代大統領誕生の歴史、(5)白痴や狂人の数が、一般的な予想とは大きく異なって、南部よりも北部の黒人の中に圧倒的に多かったことを示す 1840 年の国勢調査の結果、(6)1852 年のマサチューセッツ植民地協会の会合で、白人と黒人の共存のディレンマの解決策として領土の拡大を示唆した牧師の演説、である。

これらの歴史を念頭に、著者は 6 つの作品を論じる。その際、著者は、パフチンの手法を採用する。社会の構成要素としての多様な声をそのまま取り込む手法である。目指すのは、国家アメリカとアイデンティティの問題の解明、すなわち、次のようなアポリアの解明である。著者の努力はかなり成功しているといわなければならない。

America is a democratic nation and it is not.

America is a racist nation and it is not.

2001 年 9 月 11 日、ニューヨークの世界貿易センタービルに 2 機の旅客機が激突した。アメリカの国内で、アメリカの旅客機が、アメリカのシンボルとしての建物に激突した。この激突は、アメリカという国家に対する、もう一つの力、もう一つの文化の激突でもあった。多文化と単一文化の衝突と言い換えてもよい。本書における著者の分析は、この悲劇が、19 世紀中葉のアメリカで起きたさまざまな悲劇と決して無縁でないことを、確実に示してくれている。

(Princeton University Press, 2000, 227pp., \$16.95)

(岩手大学教育学部英語教育講座)